

広大移転と千田町商店街活動

千田商店街振興組合理事 ◆ 山根 進



一 はじめに

二十年前の広大移転の決定は愚策となつてしまった。時代錯誤の移転の前に、一商店街はなす術もない。今月もまた一軒、店が消えていく。一本また一本と齒の抜け落ちるような閉店が続いている。空き店舗の前にはテナント募集の看板が、借り手もなく埃をかぶり傾いたままだ。ここは広島のご真ん中「広大正門前の千田商店街」。かつては広大の門前町として学生が闊歩し、若者であふれかえった街である。

二十年前の当時のことは私は知らないが、学生運動の激化は、そこで生活する住民にとって迷惑で危険なものであったようだ。当時の飯島学長は、警察を導入して学園紛争を治め、統合移転を計画。この計画に住民の反対運動が起こらなかったのは、この時、広大は「迷惑施設」の感が強かつたせいであろう。しかし、不幸にも「学生が街から消えてゆく」という現況を予期できなかつたのである。いっぺんに移転されれば、そのマイナス面もいっぺんに表面化し、反対運動や跡地利用の具体案も急がれたであろう。ところが、遅々として進まず、二十年もかかってしまった。

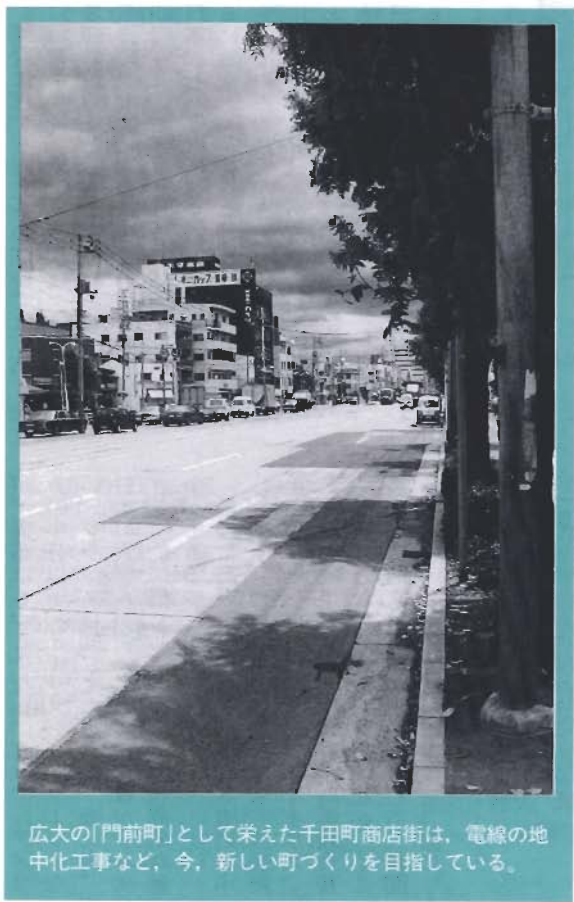
広大跡地問題に対して、広大自身も、学生も、住民もそれぞれ取り組んだが、時の流れは問題意識を風化させ、あきらめムードが主流となつてしまった。

総合科学部の移転は、東千田キャンパスから新入生が激減したことを意味した。能

天気な千田商店街並びに周辺の商店街も、ことの深刻さを再確認。しかし時すでに遅し。今さら打つ手がない。問題の本質をあいまいにしてきたツケがいつべんにやってきた。十年一昔とすると、もう二昔前の決定である。

時代の要求は刻々と変化する。どんなに崇高な決定であつても、時代の流れの中で色あせ無意味なものとなつた施行例は数多くある。時代錯誤は、善策を愚策に変える。人災にも似た不況の中で、広大周辺部は苦しみあえいでいる。都心の空洞化は、広島市の大きな社会問題になつてしまった。明日の見えない「千田」に誰も投資しない。「このままでいいのか」一人ひとりの経営者の胸の底に、不安と自問自答が繰り返

される。二十年もたつて広大跡地の再利用の具体策が行政側から出ていない現在。また、時代の流れの中で新しい利用案が生まれても不思議ではない。商店街は、行政の答申待ち消極的態度から急変。直接、行政と話し合いたい。また、よりよい利用案があるなら、「発表の場所」を設けよう。それは、決して行政と対立することではない。明日の千田のために、広島のために、行政と手を組み、一致協力して、一刻も早く「広大跡地の早期有効利用の実現」を最重要課題として取り組みたい、と決意したからである。先輩諸氏の努力を無駄にしないためにも、千田商店街は遅時きながらも、活性化に向けて新規巻き返し大作戦を決心することとなる。



広大の「門前町」として栄えた千田町商店街は、電線の地中化工事など、今、新しい町づくりを目指している。

二 フリーマーケットと2・26

活性化のために人事も一新され、四十歳台中心となり、「なにかおもしろいものをやろう!」と、広島で初めての大規模なフリーマーケットを選択。リサイクルブームと物珍しさも手伝って大盛況。組合員相互の親睦と信頼は、このイベントの成功により、急速に強化された。

街づくり委員会が結成され、「2・26」を主催。タウンギャラリー構想・千田の歴史・都市計画案の内容説明が発表された。若手のスタッフは、昼夜を問わず、奥さんの不平も聞き流し、実によく頑張った。当然、カンカンガクガクもあつたが、今、商店街は生き返つた。

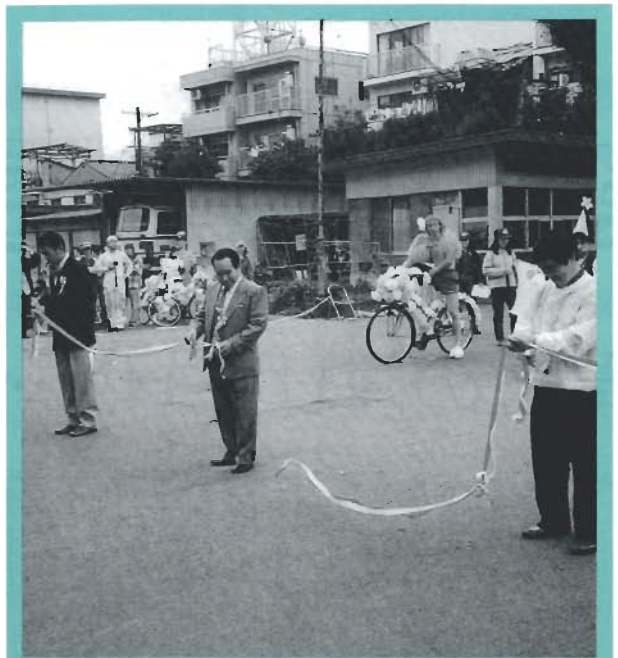
三 私と千田祭

貯金局跡地、日赤血液センターとフリーマーケットを成功させて、次はどこにしようかと検討中に、役員の中から「広大生と一緒にやってみないか」との声が上がり、私にそのパイプ役の白羽の矢が打ち込まれた。というのも、広大正門横で「びっくのーず」という漫画喫茶を経営しており、学生街の喫茶店として、昔から広大生とは懇意であつたこと。また、二年前に学士入学生として法学部二部に在籍しており、店主プラス学生という私の立場が稀であつたことが原因と思われる。恒例の大学祭は、実行委員会の事務局が西条に移転しており、六月祭もなく、せめて十一月祭だけでも、と計画しても、資金ゼロでは手の打ちようがないといった学生の状況であつたため、千田商店街の申し込みは、学生にとって決起する絶好のチャンスとなつた。

あつと言う間に八十名の千田祭実行委員

会が組織された。「地域に開かれた広島大学」をコンセプトとし、「若者の文化の発信基地」を目指し、千田祭は運営された。しかし、実際に手を組んで運営し始める点、年代のギャップ、ものの考え方の相違点が表面化し、お互い悩まされた。カンカンガクガクの末、本音をさらけ出し、とことん議論して始めて、父と子ほどのジェネレーションギャップをそれぞれが認識しあい、「千田祭」の成功に向けて譲り合った。

私は、胃の痛みを押さえながらのパイプ役であったが、広島大学当局の寛大なる理解と絶大な協力は、大きな味方であり安心であった。十一月六、七日の両日には、一万人以上の入場者。広大始まって以来、一般市民がキャンパス内に堂々と入り、大学祭を楽しんだ。商店街側の提案した第三回フリーマーケットは、リサイクルバザーとして学生の手で運営され、雨天にもかかわらず、教室と廊下を利用して百五十店舗の出店があり、広島ギネスを更新。もう一つの広大跡地利用を考える会の公開討論会



千田祭のオープニング

は、「広大コロンブス」と命名。広大会による事前の情報収集、アンケート調査、地域開発に詳しい先生の支援もあり、学生のアイデアはもろろんのこと、商店街、一般市民からも多くの提案が発表された。

こうして、学生と商店街と市民による共同祭の成功は全国的にも稀で、国立大学の名門「広島大学」が、地域に開かれた大学づくり、しかも学生の自発的行動で行われている、と、この千田祭は注目された。新聞にも五回にわたり大きく連載され、テレビ・ラジオとマスコミにも好評であった。

こうして、大成功のうちに、学生を交えての反省会と打ち上げ会。最初ゴワゴワと話していた学生も商店主も、この千田祭を通じて酒を酌み交わし、双方とも反省会では言いたい放題。しかし笑い声のなかで「また来年もやりましょう!」と意気投合した。

商店街はその後、第二回の千田祭に向けて予算も確保し、学生側の受け皿ができるのを待っている。考えてみれば、同じ

千田地区に生活しながら、学生と住民の交流がなかったことも不思議である。もし、千田祭が二十年前に行われていれば広大の移転はなかったのに、と悔やまれてしかたない。第二回、三回と千田祭は継続してゆかれることを望む。

四 商店街活動の目的は、 広大跡地問題にあり

五月二十二日には千田スポーツ公園で「第一回広島スーパークリックベース選手権大会」を開催する。中区スポーツセンターを中心に、千田学区全体のイベントに昇格した。

いろいろのイベントは次々に成功を収めているが、我々にとっては、イベントは手段であって、目的であってはならないと思っている。我々の目標は「広大跡地早期有効利用の実現」であり、願わくば集客力のある施設を誘致し、百の通行客が、二百、三百と増加するものを期待したい。

具体案が提示されていない現在、将来が不安であるし、五十、ゼロと減少するものが誘致されるのでは、との危惧もある。我々がイベント事業を行うのは、街の活性化もあるが、広大跡地問題のPRもある。無関心から関心を持ってもらうことが大切なことと信じている。そして、関心を持っていろいろな意見が出てくるはずである。行政にとつても参考となる意見があるかもしれない。

「発表の場」を設けたい。自由な発想のなかに、明日のヒントがあるのでは。生活主体者たる女性の意見や学生の意見を、フリーマーケットで集めたい。懸賞論文の一般公募であれば、私は「東洋医学大学構想」という題目で応募するつもりだ。

こうした発表の場は、行政自らが、イベ

五 広島大学への要望

① 千田は文教地区の歴史を継続したい。そのためには、少なくとも二部存続をお願いしたい。生涯教育、社会人の再教育、夜間大学院の構想を、より速く実現してもらいたい。

② 大学内部に、学生の推薦するお店の学生街をつくらせてもらいたい。商店街と学生とは、生活面で長い歴史がある。学生にとつても便利だし、我々も実はさみしいのである。

しかし、実質五か月の営業日数では出店は困難だ。思い切った優遇策が先決ではある。

③ 千田祭のように「地域に開かれた広大」を目指してもらいたい。地元のイベントにも広大生が参加してもらえよう協力的体制と窓口をつくっていただきたい。

六 終わりに

二十年前の決定は愚策であった。時代錯誤の移転の前に、一商店街はなす術もない。しかし、我々は広島大学と今後も深く親しい付き合いを願っている。いままさししょうがない、とあきらめないでもらいたい。あきらめないこと。行動すること。そこに「明日に架ける橋」があると信じている。

広大会であり、社会人であり、商店街の人間でもある私とその架け橋になれたら、と希望している。